# 自称女神様と恋に墜ちて！？

松本

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
自称女神様と恋に墜ちて！？

【Ｎコード】
Ｎ９３３５Ｂ

【作者名】
松本

【あらすじ】
神が作りたもうた最高傑作の高校生と破天慌な女神が織り成すラブコメディーです（笑）自分の美貌に気付いていないどころか悪人面だと思い込んでる高校二年生の浅野大和は、ある日の通学途中、自称・女神様の朝霧に出会います。自称・女神様は『たったの２００歳』なのに退屈な天国から地上へと逃げ出してきたのです。運命的な出会いをした二人を様々な障害が引き裂こうとしますが、二人は『愛の力』で困難に立ち向かい、切り抜けるのです。以上、朝霧でした（礼）

## プロローグにすらならないもの（前書き）

あらすじですらありませんが……見て頂けたら幸いですっ（笑）

## プロローグにすらならないもの

人生ってのは大抵、自分の思い通りになんか動いてくれない。

人はそれを運命だの宿命だの言うが、俺は違うね。んなもんで人生を左右されてたまるか。

だから、俺が高2なっても彼女すらいないというんなら……それは俺の頑張りが足りないからだと思う。決してそんな星の下に生まれた訳ではない。

つまり、これから起こる出来事も運命なんて陳腐なものではなく、俺が撃ち砕かないといけないのだ。

かなり憂鬱でうっとおしい出来事だったとしてもだ。俺はやると言ったらやる……多分な。

貴方は女神を信じますか？

いいえ、信じません。てか信じるかアホ。

これが昨日までの俺の常識。
が、どうやら俺はこの考えを改めなければならないらしい。
なぜなら、道路のど真ん中で倒れている俺の腕にはスヤスヤと眠りこけている、超美少女兼自称女神様がおられるからだ。

ここまでで俺はこの話を読んでる皆に大変意地悪な事をしている、と思う。

あらましも自己紹介も全て省いているからな、すまん。
自己紹介しとこうか、俺は浅野大和。
浅野君でもヤマトでもヤマPでも好きに呼んでくれ。

今年で17になる運動神経抜群、頭脳明晰で学級委員のほぼ完璧人間だ。

なぜほぼかと言うとだな……俺の…顔は怖い。俗に言う悪人面だ。黒い髪に生まれ持っての鋭い目と薄い唇、オマケにこの低い声。

この顔近付けば、どんな女の子も頬を赤くし、目を潤ませしまいにはその場で座りこんでしまう。
これでは彼女どころか女友達すら難しい……。

何しろ学年インパクトのある顔大会で一位の顔だ……あの拍手は俺への当て付けか？

通学途中では一年の女子グループが俺を待ち構えては悲鳴を上げて

逃げ、戻って来ればまた逃げ……俺をそんなに傷つけたいか。

どうすればモテるかを妹に聞けばもの凄い顔で睨まれるし、男友達に聞けば怒鳴られる……。

俺の青春は終わった……。

……もう、俺の事はいいだろう。

顔以外は完璧な学級委員と認識しろ。

さすがに……悲しくなってきたからな……続きは今度だ……。

## プロローグにすらならないもの（後書き）

少しでも興味を抱いた方は続きを読んでくださいませ（苦笑）

## 1・ついてない目覚め（前書き）

第一話です。がんばりましたので楽しんでくださいね（笑）

## 1・ついてない目覚め

クソ暑い初夏の朝……

ドスン。

俺がある衝撃と共に目を覚ました時、俺の世界の上下が逆になっていた。机やポスター、電気までが逆だ。

世界が上下逆になった――――なんて事あるわけねーよな、当然。

俺の『常識』がどれだけ世界の『常識』とリンクしているのかは知らねーが、それくらいはリンクしていてくれてるだろう。

じゃなかったら困る。

俺の17年間で培ってきた『常識』が無駄だった事になっちまう。

ま、そんな事はどうだっていいんだよ。

世界の常識と俺の常識がリンクしていると仮定すれば……俺はベッドから落ちて中途半端な一点倒立をしている状況、という結論が出される。それを裏付ける証拠に、頭の一ヶ所がイテーし、首も悲鳴を上げてる。

うん、我ながら非の打ち所のない考えだ。

と、一人でニヤニヤしてたら、ドアの隙間から覗く双鉾と目が合った。中2になる妹だった……。

気まずい沈黙。

おそらく俺を起こしにやってきたんだろう。で、部屋を除いたらベッドから落ちてニヤニヤしている兄がいて困惑している。そんなト

コだろうか。

「兄さん……キショいよ…」

辛辣な声音で呟くと、無情にもヤツはドアを閉めやがった。
俺はさっさと起きなかった事を激しく後悔し、力なく立ち上がる。

男特有の朝事情で腰を引きながらトイレに向かうと、リビングから母親のけたたましい声がする。是非とも目覚ましとして世界中に発信したいね。

「大和！！　いつまで寝てる気なの！？」

「朝っぱらからうるせーな……もう起きてんだろーが」

「言い訳しないでさっさと顔洗ってきなさい！」

「言い訳じゃねーよ！　これから行くとこだっての！」

「じゃあさっさと行きなさい！」

ダメだこりゃ……時代は省エネなんだし、わざわざ朝から無駄なエネルギーを使う必要もないだろ。
俺はそう結論づけるとトイレに向かった。
返事は！！？なんて声が聞こえたが空耳だろう、と考え無視する。

顔を洗ってリビングに入ると、妹はすでに食パンを頬張っていた。
テレビじゃみのさんが今日も絶好調だ。あの人寝てんのか？

食卓に並んでるのは食パンと目玉焼きにハム数枚と牛乳。贅沢さえ言わなければまずまずの献立だ。
正直……和食が好きだけどな。
「おはよう……」
妹が小さく言う、視線はテレビ画面に向いていた。まださっきの事を気にしてるのか？
「ああ……」
俺は愛想のない妹同様の挨拶を返した。
ドカッと椅子に腰を降ろし、首を左右に鳴らす。コキッコキッと気持ちいい音が頭に響く。食欲を湧かせる匂いが鼻の細胞を刺激し、脳内の空腹反応とマッチして俺の腹を鳴らした。
さて……食うかと箸に手を伸ばすが、醤油が見当たらない。目玉焼きと言ったら醤油だ。ソースとか言う奴がいたら俺はソイツに醤油の素晴らしさを一時間語ってやる。拳を交えてな。
「オイ、醤油」
妹に、取ってこいを省略した指示を出すが、妹はチラッと一蔑するとすぐにテレビに戻った。激しく可愛くない。
「聞こえてんだろ？」
「うん…うるさい」
なんだこの態度は……ウザいと無言でけなされている感じだ。
いや、実際言葉裏にやられている。

こめかみがヒクつく。
怒るな…大人気ないぞ…俺。
相手は中1だぞ？　俺は数回、口呼吸をすると、やや兄貴ぶった（兄貴だけどな）口調で訪ねる。
「何で取ってくれないんだ？」
「無意味……」
こんのクソガキ……。
流石にコレには我慢しなくていいんじゃねーか？
「テメェ……怒るぞ？　いいから取ってこい！！」
妹は物言いたげな視線を俺にぶつけると、コクンと頷いた。心なしか俺に対する同情を感じた。
「……わかった」
そのまま椅子から立ち上がると、俺の横に立つ。恐いくらいの無表情だ。
「んだよ……？」
答えることなく、妹は俺の顔の真下にある容器に手を伸ばした。俺の視覚神経と記憶が正しければ……それには醤油が入っていたはずだ。
「はい……醤油」

妹は目玉焼きが黒くなるほど、大量に醤油をブッかけた。俺はただうつ向くことしかできなかった。

「まだ足りない？」

すでにハムが沈没するほどの醤油がかかっているが、妹は一応俺に聞いた。情けか、もしくは更に追い詰めるためか。どちらにしても……情けない。

「いや……もう十分だ……ありがとう」

「どういたしまして」

妹は醤油を乱暴に置くと、席に戻っていった。

「いただきます……」

か細く呟いた俺は、目玉焼きに箸を伸ばす。
よく味わってから飲み込む。
しょっぱい…。気分的にもしょっぱい。

気分もそれに比例するのは間違いなだろーな。そして、今日はロクな日にならない予感がする。

## 1・ついてない目覚め（後書き）

どうでしたか？何かを感じた方は感想・意見をお願い致しますm（
＿＿）m
参考にいたしますのでっ

## 2・ついてない朝（前書き）

大和にイラッと来ても知りませんよ～（苦笑）

## 2・ついてない朝

間違いなく体に悪い朝食を食べ終わった俺は、『不機嫌ですオーラ』を全身から発している妹を避ける様にして台所に食器を持って行く。ホントにチクチクするような視線を背中に受けながらすごすごと歩く俺は情けないの一言に尽きるだろう。

威厳ねーな……俺…。

ま、いいさ。追々お兄様の魅力を分からせてやるさ…きっと、いつか。

母親から弁当と食器を交換し、台所から戻ってきた俺は二階の自室へと戻ろうとリビングを出た。

決して長いとは言えない廊下を歩き玄関の近くにある階段へと歩を進める。

さっさと着替えて学校行こ……今日はついてない……。何か嫌な事が起こりそうな気がする…。

そう心の中で呟いて階段に足をかけようとした時、何かに裾を引っ張られた。

「なっ…！」

気を抜いていた俺はバランスを失い、そのままのけぞる様にして倒れて行く。いきなりか！いきなりなのか！

くそっ……。

必死に手摺に手を伸ばすが、その手は空を虚しく掴んだだけだった。
このままじゃ後頭部と背中がヤベーっ……こんな時こそ、俺の力を発揮！

俺は持ち前の運動神経を十二分に活かし、体をひねって床に両手をつける形で受け身を取る。落ちる衝撃にそなえ、軽く力を抜くことも忘れない。
果たして直撃を免れた俺は安堵の溜め息を付き、自分が目を閉じていた事に気がついた。

ま、生理反応みたいなもんだ。恥ずかしいことじゃない。
溜め息まじりに目を開けた俺は一瞬で瞼を元に戻す。

なぜなら見たくないもの兼認めたくないものが脳に送られて展開したからだ。

だが、現実は歪めようがなく、認めたくなくてもそれは逃げることにしかならない。

俺は逃げるのが嫌いなたちの人間だから、目を開けた。

もう、わかるヤツはわかるだろう。
お約束だ。俺は妹を押し倒していました。

「……」

「……」

無言で見つめ合う二人の間に形容し難い雰囲気が充満して行く。
体験してみてわかる、これは動けない。つか、動かない。

「……なんだ」

なぜ裾を引っ張ったんだ？と明確に言わない俺の問いを妹は理解したらしく、小さく告げた。

「……兄さんに……謝ろうと」

「何を……？」

「醤油……ごめん。やりすぎた」

そう言うと頬を赤く染め、ギュッと目を閉じる。
これ何てゲーム？

……妹にグッと来たのは久しぶりだ。念の為に言っておくが、俺にロリコン兼シスコンの気はない。

俺は気にするなと告げると、プルプル震えていた腕に力を入れて立ち上がる。

ポゥ～としていた妹を立ち上がらせ、乱れたパジャマを整えてやる。

よし、俺は着替えるからな。

コクと頷いたのを確認した俺は床に落ちていた弁当を拾い、自室に戻る。

ゆっくりとドアを開け、背中で閉めた俺は弁当を空っぽの鞄に放り込んで脱力した。

くそ……朝からなんてデンジャーな……。

急いで着替えた俺は挨拶もそこそこに家を飛び出した。

これ以上変な事が起きませんように……。

## 2・ついてない朝（後書き）

羨まし……ゲフン……感想は随時歓迎致します～（笑）

## 3・ついてない通学路（前書き）

中間考査前なのでしばらく更新できそうもありませんm（＿＿）m

それでもちょびちょび書いていますので応援してくだされば幸せです（苦笑）

感想は随時歓迎していますので～～～

## 3・ついてない通学路

まったくもって腹立だしい。
もはや見慣れた道を歩きながら俺は考えていた。
朝っぱらから不幸の連続だ。
しかもそれら全てが妹関連だというのだから始末が悪い。
いや、俺が悪いのか？

すれちがう女生徒達の視線もこれまた始末が悪い。
こちらの顔をチラチラ見るだけならいざ知らず、目が合うとさっと顔を伏せてしまう。
怖いもの見たさか？
まるで自分がピエロか何かと錯覚しそうになる。
頼むから俺をこれ以上刺激しないでくれ。
結構繊細なんだぞ。
ジロっと女生徒達を見やれば、まさにクモの子を散らす様に逃げて行った。
換高い矯声を上げながら。
いつか泣くからな……。

しかし、まぁ、あれだ。
まさか妹に女性を感じる日が来ようとは思わなかったな。つい、こないだまでは一緒にお風呂に入ってたのにな……。

いやはや、時が経つのは速いもので。
兄としては寂しいような嬉しいような。

繰り返し言うが、俺はロリコンでもシスコンでもないからな。
中学に入った途端にお兄ちゃんと呼んでくれなくなった時は軽い衝撃を覚えたのを記憶している。

うむ、どちらかと言うと俺のが妹離れしてないのかもしれん。

とにかく、そんな時はどんなに理由が小さかろうとイライラするものさ。

特に今日の星座占いが１２位で女難なんて出た日はそれはもう、道行く車や照りつける太陽さえも恨めしい。

敢えてラッキーカラーを避けまくりたくなるね。

ま、そもそも俺は運命や宿命なんて信じない。それは己の力で切り開いていくものだと自負しているからな。

俺は自己陶酔しながら拳を握りしめ決意する。
今年の夏にこそ、彼女を作ると。

きっと俺の瞳には火がともり、悪人面がより一層パワーアップしているんだろうな。
やれやれだ。

さて、最初に描いたように、ここまでで俺の回想はほぼ終わった。
プロローグにも書いたように、俺の腕の中には自称女神様がいるからな、後は何でこうなったかってことだけだ。
こっからは序曲も終わり、本奏が始まる訳だが、これほどまでに心臓に悪い出来事は後にも先にもないだろう。
でなければいつか死ぬぞ、俺。

まぁ、予想してる奴もいるだろうが、女神様は文字通り『墜ちてきた』からな。

この馬鹿馬鹿しい出会いを説明出来るヤツは手を挙げろ。
ジュースでも奢ってやるぞ。

## 3・ついてない通学路（後書き）

中間考査に負けないよう頑張りますので意見があれば下さいね～酷評でも大丈夫ですっ！

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9335b/

---

自称女神様と恋に墜ちて！？

2010年12月2日22時30分発行